

Title	スワヒリ語動詞の反復形 : 機能と派生の条件
Author(s)	牧野, 友香
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2016, 27, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71113
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スワヒリ語動詞の反復形¹⁾

— 機能と派生の条件 —

牧野 友香

0. はじめに

スワヒリ語の動詞には、動詞語幹の全体を繰り返す派生形式がある。例えば以下のような例である。

- (1) *Sungura huyo a-li-ruka-ruka msitu-ni.*
ウサギ 9 その 1 SM3sg-PST-跳ぶ-RVS 森-LOC²⁾
「そのウサギは森でびよんびよん跳んだ。」

- (2) *Ni-li-soma-soma kitabu hicho.*
SM1sg-PST-読む-RVS 本 7 その 7
「私はその本を読み流した。」

(1) *-rukaruka* 「びよんびよん跳ぶ」と (2) *-somasoma* 「読み流す」は、それぞれ動詞語幹 *-ruka* 「跳ぶ」と *-soma* 「読む」の全体が繰り返されたものである。*-rukaruka*、*-somasoma* のような動詞語幹の全体が繰り返されたものを反復形 (中島 2000:162) と呼ぶ。反復形については Ashton (1947) や中島 (2000) など、スワヒリ語の文法書で必ず述べられている文法現象ではあるが、以下の3点についてはまだ検討の余地があると思われる。

¹⁾ 本稿は、『スワヒリ語における動詞語幹の全体重複と部分重複について』(牧野 2015) と、第150回日本言語学会大会 (2015年6月20日、於：大東文化大学) での口頭発表がもとになっており、例文及びその説明には重複するところがある。発表に際し、また発表の場以外でも、たくさん大変有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。しかしながら、いただいたコメントを十分に反映できてないところもあり、これは言うまでもなくすべて筆者の力不足によるものである。この部分については今後の課題としたい。

²⁾ スワヒリ語には「名詞クラス」と呼ばれる名詞の分類があり、名詞は15種類のグループに分けられる。主語接辞、目的語接辞、名詞修飾語は、それぞれ名詞に呼応した形で現れる。例文のグロスで名詞の後ろに示している数字は、その名詞が属する名詞クラスを表し、名詞以外についている数字は呼応している名詞が属する名詞クラスを表す。主語接辞と目的語接辞は人称 (単数は *sg*、複数は *pl*) またはクラス番号で表す。時制接辞はその時制の種類を表す。また、標準スワヒリ語には定められた正書法がある。本稿の例文は、その正書法に従う。

- A) 先行研究で挙げられている用例が、*-piga*「打つ、叩く」や*-imba*「歌う」、*-soma*「読む」などの動作動詞に偏っている。
- B) 機能の説明が「動作の繰り返し、強化、継続の意味を表す」といった感覚的な説明に留まっている。
- C) 生産性については、Shadeberg (1992) や Nurse (2008) が「非常に生産的で、一般的である」と述べているのみであり、派生の条件について述べられたものは一切ない。確かに生産的ではあるが、例えば、*-chanua*「咲く」や*-vua*「脱ぐ」など、反復形を作りにくい動詞語幹も存在する。

A) については、母語話者への聞き取りによって動作動詞以外のデータを補強する。そのうえで、B) 動作動詞と状態動詞の両方の反復形の用法を再検討する。C) については、反復形の派生を阻む要因を、動詞のアスペクトの観点から検討する。この3点を検討し、スワヒリ語における動詞の反復形の機能と派生の条件を明らかにする。

なお、スワヒリ語の動詞は以下のように動詞語幹に接辞が連結されて構成される。直説法においては、内の要素は必須で、()内の要素は任意である。

<スワヒリ語の動詞構造>

主語接辞	—	時制接辞	—	(目的語接辞)	—	動詞語幹 ³⁾
Ni-		li-				soma.
1人称単数主語接辞-		過去時制接辞-		7クラス目的語接辞-		読む
「私はそれ (7クラス名詞) を読んだ。」						

1. 先行研究での用法

この節ではまず先行研究で挙げられている用法をまとめる。スワヒリ語動詞の反復形は、前述の通りどの文法書でも必ず紹介されている文法事項である。しかし、いずれも反復形について十分な説明がなされているとは言えない。これらの先行研究で述

³⁾ 動詞語幹は、正確には動詞語根—(派生接辞)—動詞語尾に分けられる。派生接辞が挿入された場合、反復形はその派生形ごと繰り返される。本稿では、動詞派生接辞が入る場合のみ動詞語根と語尾とを分けて示すこととする。

べられている反復形についての説明を以下で概観する。

Ashton (1947:316-317) は、全品詞、形態素レベル、単語レベルの重複をすべてまとめて扱っており、重複の機能として以下の4つを挙げている。

- I. 激しさの様々な側面を表し、強調する。単語に含まれる考えを増加あるいは拡張させる。豊かさや多様性を表す
- II. 単語が表わしている意味を軽減、緩和する
- III. 動作や状態の継続を表す
- IV. 分配の考えを表す

しかしながら動詞語幹の重複についてはわずかししか触れられておらず、上記の I~IV のうち、動詞語幹の例が挙げられているのは II、III のみである。II の例として (3)、III の例として (4) がそれぞれ挙げられている。

(3) *Mtoto huyu a-lia-lia tu.*
子供1 その1 SM3sg.PRS-泣く-RVS ただ
「その子供はただしくしく泣いている。」⁴⁾

(4) *Tu-li-po-toka nje, tu-li-anza*
SM1pl-PST-R18-出る 外 SM1pl-PST-始める
ku-tanga-tanga huko na huko.
INF-ぶらぶら歩く-RVS あちこち
「私達は外に出たから、あちこちをほつつき歩き始めた。」

(3) は動詞語幹-*lia* 「泣く」が反復形になった例である。動詞語幹の-*lia* は「泣く」という意味であるが、繰り返されることによって「しくしく泣く (原文: *whimper*) 」という意味になっている。(4) は動詞語幹-*tanga* は「ぶらぶら歩く」という意味であるが、全体が繰り返されると「ほつつき歩く (原文: *wander about*) 」となっている。

Novotna (2000:64,65) はスワヒリ語の重複のみに特化した先行研究である。しかしこれも、全品詞、形態素レベル、単語レベルの重複がすべてまとめて扱われており、動

⁴⁾ 例文の日本語訳は筆者によるものである。

詞語幹の重複についての説明は十分ではない。また、重複が可能な音韻的あるいは形態的メカニズムの説明に主眼が置かれており、重複がどのような意味的機能を持つのかについては十分な検討がなされていないように思われる⁵⁾。反復形の用法として挙げられているのは、次の3つである。

V. 強化

VI. 継続した動作

VII. 繰り返しの動作

Vの例として (5b)、VIの例として (6b)、VIIの例として (7b) がそれぞれ挙げられている。

- | | | |
|--------|---------------|--|
| (5) a. | <i>-hoji</i> | 「要求する、吟味する (原文 : request, examine) 」 |
| | b. | <i>-hoji-hoji</i> 「徹底的に反対尋問する (原文 : cross question thoroughly) 」 |
| (6) a. | <i>-cheka</i> | 「笑う (原文 : laugh) 」 |
| | b. | <i>-cheka-cheka</i> 「笑い続ける (原文 : keep laughing) 」 |
| (7) a. | <i>-imba</i> | 「歌う (原文 : sing) 」 |
| | b. | <i>-imba-imba</i> 「頻繁に歌う (原文 : sing frequently) 」 |

中島 (2000:162) は、数行ではあるが動詞語幹の重複をほかの品詞と分けて記述している。用法として以下の3つをあげている。

VIII. 動作の反復

IX. 軽度の動作

X. したり止めたりのいい加減な動作を表す

例としては以下のものが挙げられている。

⁵⁾ このような、重複について音韻的あるいは形態的なメカニズムの説明に重きが置かれ、形態的意味的な特徴についての分析があまりなされない傾向は、Inkelas and Zoll も指摘している通りである (Inkelas and Zoll 2005:3)。

- (8) *-soma-soma* 「読み流す」 < *-soma* 「読む、勉強する」
 (9) *-piga-piga* 「何度も打つ、軽く打つ」 < *-piga* 「打つ、殴る」
 (10) *-cheza-cheza* 「ぐらつく、遊びがある」 < *-cheza* 「遊ぶ」

Loogman (1965:145)⁶⁾も動詞語幹の重複をほかの品詞とは分けて記述しており、重複した動詞語幹を Frequent Verb (頻度を表す動詞) と呼んでいる。この Frequent Verb について「近い間隔で、ある一定期間継続してなされる動作の繰り返しを表す」と述べ、以下のような例を挙げている。

- (11) *-piga-piga* 「何度も殴る (原文: to strike with repeated blows)」
 < *-piga* 「打つ」
 (12) *-imba-imba* 「長い時間歌い続ける (原文: to go on singing for a long time)」
 < *-imba* 「歌う」
 (13) *-tembea-tembea* 「絶え間なくぶらつく (原文: to wander around continuously)」
 < *-tembea* 「散歩する」

次に Shadeberg (1992:10) は、動詞語幹の重複について「弱い力での動作の継続や繰り返しを示す」と述べ、Ashton (1947:316) が挙げた (3) と同じ例を挙げている。

それぞれの先行研究での説明をまとめると、反復形の用法は以下のように集約できる。

- ①動作の繰り返しを表す (Loogman 1965:145⁷⁾、中島 2000:162、Novotna 2000:65、Shadeberg 1992:10⁸⁾)

⁶⁾ Loogman は動詞語幹の重複は多音節の動詞語幹でのみ許されると記述しているが (Loogman 1965:145)、例えば 1 音節の動詞語幹-*la* 「食べる」は、以下のように動詞語幹の前に音節数調節のための-*ku*-を入れて 2 音節にすることによって、反復形を派生させることができる。

(i) *A-na-ku-la-kula* *chakula.*
 SM3sg-PRS-KU-食べる-RVS 食事 7
 「彼は不規則に食事を食べる。」

⁷⁾ ただし、Loogman (1965) は①、②をまとめてひとつの用法として捉えている (Loogman 1965:145)。

⁸⁾ ただし、Shadeberg (1992) では①、②、④がまとめてひとつの用法として捉えられている (Shadeberg 1992:10)。

②動作の継続を表す (Ashton 1947:316、Loogman 1965:145、Novotna 2000:65、Shadeberg 1992:10)

③強化を表す (Novotna 2000:64)

④動作の弱化を表す (Ashton 1947:316、中島 2000:162、Shadeberg 1992:10)

以上、先行研究で述べられている反復形の用法について述べた。前述のとおり、例が動作動詞に偏っており、説明されているのもそこに見られる用法のみである。しかしながら、実際には、状態動詞が反復形になる例や、先行研究には挙げられていない用法も見つかっている。次節ではそれについて述べる。

2. 新たに見つかった用法、及び反復形の中核的な機能

筆者の調査で新たに見つかった反復形の用法には、以下のような例がある。なお、本稿のデータはタンザニア出身のスワヒリ語母語話者 Z 氏への聞き取りによって採取したものである。

(14) *Kamba hizi zi-na-legea-legea.*
ロープ 10 この 10 SM10-PRS-緩む-RVS
「このロープはどんどん緩む。」 <度合の進行>

(14) *-legea* 「緩む」は状態動詞であり、反復形になることによって「どんどん緩む」という意味になる。つまり、緩み度合いが増すことが表されている。

(15) *Matawi ya-li-kwanyuka-kwanyuka kwa upeo.*
枝 6 SM6-PST-折れる-RVS ~で 風 11
「風で枝が何本も折れた。」 <同時多発性>

(15) *-kwanyuka* 「折れる」も状態動詞である。ここでは、1本の枝が何か所も折れているわけではなく、「複数の枝が何本も折れる」という意味になり、名詞の方が複数になることによって回数の多さが表されている。つまり、反復形が表す繰り返しはひとつのものに複数回起こる場合だけではなく、複数の物に同時多発的に起こることを表す

場合もあるということである。

(16) *Yule mbwa a-na-bweka-bweka.*

あの1 犬9 3sgSM-PRS-吠える-RVS

「その犬は何回も吠える／吠え癖がある。」 <習性>

(16) *-bweka* 「吠える」は動作動詞であるが、「何度も吠える」という動作の繰り返しの意味もあるが、それだけでなく、「吠え癖がある」という習性或習慣の意味も表している。さらに、以下のような例もある。

(17) *A-li-lewa-lewa.*

SM3sg-PST-酔う-RVS

「彼はふらついた／よろめいた。」 (守野・中島 1995)

<ある状態下でなされる典型的な動作が切り取られる>

(17) では、*-lewa* 「酔う」は単独で使われる場合は状態動詞的な側面が強いが、反復形に派生した場合、酔っぱらった状態自体ではなく、「よろめく／ふらつく」といった酔っぱらった状態の時に見られる典型的な動作を表すようになる。つまり、酔っぱらった時になされる典型的な動作が切り取られ、その繰り返しを表していると言えるだろう。

度合いの進行、同時多発性、習性は、いずれも先行研究に反復形の用法として挙げられていなかった例である。以上、先行研究の用法も合わせると、スワヒリ語動詞の反復形の用法は、以下のようにまとめられる。

- ①動作の繰り返しを表す
- ②動作の継続を表す
- ③強化を表す
- ④動作の弱化を表す
- ⑤ある状態の度合いが進行することを表す
- ⑥同時多発性を表わす

⑦習性の意味を表す

⑧ある状態下にある時になされる典型的な動作を切り取って表す

これらの用法にはすべて<複数性>という共通点が見られる。例えば<③強化>と<④弱化>は一見すると逆の事柄を表しているように見えるが、動作が複数回なされることが強意・強化の意味につながる場合もあれば、その一方で一回一回の動作がおざなりに、あるいは細切れになっていることを表す場合もある。また、<⑦習性>のように、動作が複数回なされることが習慣的な意味につながることもある。⑧については、意味が完全に展開しているようにも見えるが、ある状態が複数回なされることが、その状態下でなされる典型的な動作が切り取られる意味につながったと言えるだろう。つまり<複数性>が反復形の中核的な機能であり、動作の繰り返しや継続、強化、状態の度合の進行、同時多発性、習性といった用法はそこから生じていると思われる。

なお、これらの用法の間には明確な境界があるわけではなく、また動詞によって用法が決まっているわけでもないように思われる。以下の (18) ~ (20) は、研究者によって訳し方が異なるものを再掲したものである。

- (18) -*imba-imba* 「①⑦頻繁に歌う」(Novotna 2000:65) (= (7))
 「②長い時間歌い続ける」(Loogman 1965:145) (= (12))
- (19) -*piga-piga* 「①何度も打つ、④軽く打つ」(中島 2000:162) (= (9))
 「①③何度も殴る」(Loogman 1965:145) (= (11))
- (20) -*cheka-cheka* 「②笑い続ける」(Novotna 2000:65) (= (6))
 「⑦(?) 意味もなく笑う」

これらの用法の違いは、文脈や強調される側面の違いによってもたらされるのではないかと考えられるが、今後さらなる検討が必要である。

3. 反復形の派生の条件

3.1. 反復形を作りにくい動詞語幹

反復形の派生の条件については、Shadeberg (1992) が「非常に生産的である」と述べており、(Shadeberg 1992:10)、Nurse (2008) も「動詞語幹の重複 (つまり本稿でいう

反復形) は、バントゥ諸語を通じて一般的で生産的なものである」と述べている (Nurse 2008:152)。また、反復形は動作動詞の派生形のように説明されているというのは前述のとおりである。しかしながら、前節で見たように、状態動詞にも反復形の派生が見られる。反対に、動作動詞にも反復形が作りにくいものが存在する。以下、それらの例を見ていく。

(21) a. **Mawardi mengi ya-na-chanua-chanua katika Mei.*
 バラ 6 多くの 6 SM6-PRS-咲く-RVS ~に 5月
 (intd. 多くのバラの花が毎年5月に咲く。)

b. **Mawardi mengi ya-me-chanua-chanua huku na huku.*
 バラ 6 多くの 6 SM6-ANT-咲く-RVS あちこち
 (intd. 多くのバラの花があちこちに咲いている。)

(22) a. **Yule mtu ali-vua-vua nguo moja.*
 あの 1 人 1 SM3sg-PST-脱ぐ-RVS 服 9 1つの 9
 (intd. あの人は1枚の服を何回も脱いだ(り着たりした)。)

b. **Yule mtu a-li-vua-vua nguo nyingi.*
 あの 1 人 1 3sgSM-PST-脱ぐ-RVS 服 10 多くの 10
 (intd. あの人は(重ね着していた)服を何枚もたくさん脱いだ。)

(21) *-chanua* 「咲く」は、「毎年5月に咲く」という習性の意味も、「あちこち咲いている」という同時多発的な意味も反復形では表せない。(22) *-vua* 「脱ぐ」も、服が1枚であろうと複数枚であろうと、何回も脱ぐという繰り返しの意味を反復形で表わすことはできない。以下、これらの反復形を作りにくい動詞語幹に共通する性質を、動詞の持つアスペクトをもとに考察し、反復形の派生の条件を提示する。

3.2. 限界的・非限界的

コムリー (1988) は、動詞のアスペクトの分類のひとつとして<限界的・非限界的>の区分を挙げている。これは、例えば、「イスを作る」というイベントには、イスが完成するという終着点がある。このような終着点のある動詞が、限界的な動詞である。一方、「歌う」というイベントには、そのような終着点がない。このように終着

点のない動詞は、非限界的な動詞である (コムリー 1988:71-77)⁹⁾。これを、上述の反復形を作りにくい動詞語幹に当てはめて考えると、以下のことが言える。

(23) *-chanua* 「咲く」: 満開になった時点が終着点
> **-chanua-chanua*

(24) *-vua* 「脱ぐ」: 服を全部脱ぎ終わった時点が終着点
> **-vua-vua*

反復形を作りにくいこれらの動詞語幹は、いずれも終着点を持っている。一方、反復形に派生が可能な動詞語幹には、そのような終着点はない。

(25) *-cheka* 「笑う」: 終着点なし
> *-cheka-cheka* 「笑い続ける、いつも笑う」

(26) *-legea* 「緩む」: 終着点なし
> *-legea-legea* 「どンドン緩む」

(27) *-imba* 「歌う」: 終着点なし
> *-imba-imba* 「頻繁に歌う、長い時間歌い続ける」

したがって、反復形の派生を阻む要因は<終着点を持つ限界的な動詞の性質>にある。言い換えれば、反復形の派生の条件は、<終着点がなく非限界的な動詞であること>だとと言える。

ところで、終着点がなく反復形に派生が可能な (28) *-imba* 「歌う」は、<1 曲を全部歌い終わった時点>を終着点にした文脈を作ることも可能である (コムリー 1988:71-72)。この場合、以下のように反復形を作りにくくなる。

⁹⁾ このコムリーの終着点という考え方は、Vendler (1967) の “*climax* (最高点)” (Vendler 1967:100) をもとにしていると考えられる。また、コムリーが挙げている動詞の例は Vendler の言う *Accomplishment verbs* (達成動詞) に該当するが、Vendler の言う *achievement verbs* (到達動詞) に該当する動詞にも終着点が設定できるので (コムリー 1967:74-75)、本稿では両者とも限界的な動詞として考える。

- (28) **A-li-imba-imba* *wimbo mmoja.*
 SM3sg-PST-歌う-RVS 歌 11 1つの 11
 (intd. 彼は 1 曲の歌を繰り返し歌った。)

また、スワヒリ語には適用形派生接辞¹⁰⁾と呼ばれる派生接辞があり、これは「～に向かって」という方向・目的地を新たな情報として動詞に付加する機能を持つ。反復形を派生させることができる動詞でも、適用形派生接辞をつけることで終着点を示されるようになれば反復形が作れなくなる。例えば *-kimbia* 「走る」は、以下の (29b) のように基本形の場合は反復形に派生が可能で、「軽く走る (ジョギングする)」という意味になる。

- (29) a. *Mtoto huyo a-li-kimbia.*
 子供 1 その 1 SM3sg-PST-走る
 「その子供は走った。」
- b. *Mototo huyo a-li-kimbia-kimbia*
 子供 1 その 1 SM3sg-PST-走る-RVS
 「その子供は軽く走った (ジョギングした) 。」

この動詞は (29a) で示しているように基本形では終着点は示されない。しかし (30) *-kimbi-li-a* のように、適用形派生接辞 *-li-* が挿入されると、「～に向かって走る」という意味になり、目的地への方向が意識される¹¹⁾。形態的な操作によって終着点の情報が加わった場合、以下のように反復形に派生しにくくなる。

- (30) **Mtoto huyo a-li-m-kimbi-li-a-kimbilia* *mama yake.*
 子供 1 その 1 SM3sg-PST-OM3sg-走る-APPL-FV-RVS 母 9 彼の 9
 (intd. その子供は自分の母親に向かって何回も走った。)

¹⁰⁾ 適用形派生接辞は、動詞語根の後ろに挿入されて動詞が取る項を 1 つ増やす。「～に向かって」のほかにも、「～のために～する」や、「～に向かって～する」などの意味を付け加える。

¹¹⁾ これについては、コムリー (1988) が「いくつかの言語では、かならずしも限界的な場面を差し出すとは言えない動詞から、形態論的な派生の現象としてもっぱら限界的な場面を差し出す動詞を派生させることができる」と述べている (コムリー 1988:74)。

反復形の派生ができる動詞であっても、(28) *-imba* 「(1 曲の歌を) 歌う」、(30) *-kimbilia* 「～に向かって走る」のように、文脈や形態的な操作によって終着点が設定されると、反復形の派生ができなくなる。これらの例は、反復形の派生の条件が＜終着点がなく非限界的な動詞であること＞を裏付けるものである。

3.3. 終着点に至るまでの過程

コムリー (1988) は終着点に至る過程について、終着点のある動詞は始点から終着点に至るまでの途中過程でイベントを切るとそれが成立しなくなるという特徴があり、一方で終着点のない動詞はイベントのどの局面で切ったとしてもそれは成立すると述べている (コムリー 1988:71-72)。1.2 で挙げた (15) *-kwanyuka* 「折れる」は、＜真つ二つに折れた時点＞が終着点として設定されそうであるにも拘わらず、実際には反復形の派生が可能である。これは、(23) *-chanua* 「咲く」が＜満開になった時点＞が終着点として設定され、反復形を作れないこととは対照的である。以下の (31) *-mwaga* 「こぼす」にも、同じことが言える。これについて、どの時点でイベントが成立しているかという点から考えてみる。

(31) *A-li-mwaga-mwaga maji ya ndoo.*

SM3sg-PST-こぼす-RVS 水 6 の 6 バケツ 9

「彼はバケツの水を少しずつ撒いた／汲み直しては何回もこぼした。」

cf. (32) **Fundi huyu a-li-tengeneza-tengeneza viti vingi*

職人 5 この 1 SM3sg-PST-仕上げる-RVS イス 8 多くの 8

kila siku

毎 日 10

(intd. この職人は毎日多くのイスを仕上げる)

(31) *-mwaga* 「こぼす」は＜1 杯分のバケツの水を全部こぼした時点＞が終着点として設定されそうに思われるが、反復形の派生が可能である。一方、(32) *-tengeneza* 「仕上げる」は＜イスが完成した時点＞が終着点として設定され、反復形を作れない。これらの例を見ると、終着点の有無では説明がつかないようにも思える。しかし、反復形が作れる (15) *-kwanyuka* 「折れる」や (31) *-mwaga* 「こぼす」と、反復形が作れない (23)

-chanua 「咲く」 や (32) -tengeneza 「仕上げる」とでは、以下の図で示すように、イベントが始まってから終わりに至るまでの過程が異なっている。

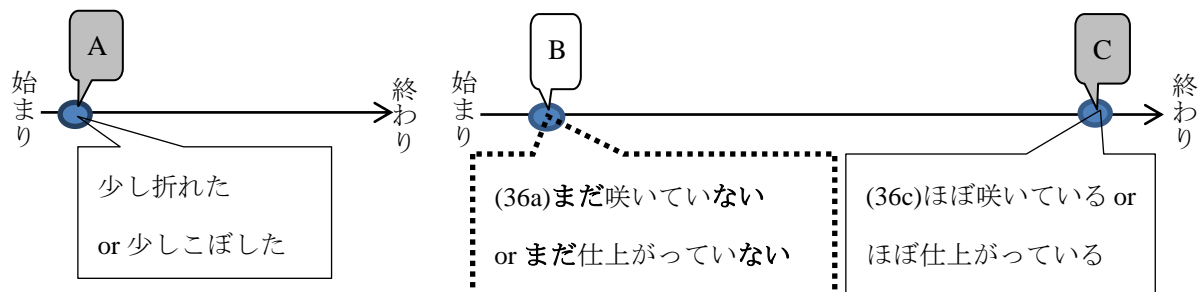


図 1：反復形が作れる動詞

図 2：反復形が作れない動詞

日本語では、「少し咲いた」のように「咲く」という動詞を、完了のアスペクトを表す「タ」と副詞「少し」に共起させることができるが、スワヒリ語の -chanua 「咲く」は「少し咲いた」という表現には用いることができない。まず、図 1 で示した (15) -kwanyuka 「折れた」や (31) -mwaga 「こぼす」は、イベントが発生したすぐの時点 (=A) でその状態や動作が成立しており、(34) のように完了を表す接辞 -me- や副詞 kidogo 「少し」と共起することができる。

(33) Matawi ya-li-kwanyuka-kwanyuka kwa upeo.

枝 6 SM6-PST-折れる-RVS ~で 風 11

「風で枝が何本も折れた。」 (= (15))

(34) A-me-mwaga maji ya ndoo kidogo.

SM3sg-PFT-こぼす 水 6 の 6 バケツ 9 少し

「彼はバケツの水を少しこぼした。」

しかし、(23) -chanua 「咲く」 や (32) -tengeneza 「仕上げる」 の場合は図 2 で示したように、動詞が表す動作や状態の成立は、終着点に達した時点あるいはほぼ達した時点 (=C) であり、その前の段階では、動詞が表す動作や状態が達成されたと言うことはできない。つまり、まだ咲き始めの段階だと以下の (35a) のように否定の表現を用いることになり、(35b) のように -chanua 「咲く」と kidogo 「少し」を共起させることはできない。(35c) のように完了を表す -me- と -chanua 「咲く」が共起できるように

なるのは、「咲く」という状態がほぼ満開に達した時点 (=C) になってからである。

(35) a. *Wardi hili hali-ja-chanua bado.*

バラ 5 この 5 否 SM5-否 PFT-咲く まだ

「このバラはまだ咲いていない。」

b. **Wardi hili li-me-chanua kidogo.*

バラ 5 この 5 SM5-PFT-咲く 少し

(intd. このバラは少し咲いている。)

c. *Wardi hili li-me-chanua.*

バラ 5 この 5 SM5-PFT-咲く

「このバラは咲いている。」

(32) *-tengeneza* 「仕上げる」についても、同様のことが言える。イベントが始まってすぐの、対象物であるイスがまだ出来上がっていない状態で「少し仕上がった」のような表現はできず、否定の表現を使うことになる。イスがほぼ仕上がった状態に達しないと完了を表す *-me-* を共起させることはできない。つまり、反復形の派生を阻む終着点というのは、始まりから段階を経て至るような終着点だと言えるだろう。

ただし、終着点の有無では説明がしにくい例もある。例えば、以下のような感情を表わす動詞が挙げられる。

(36) ??*A-na-kasirika-kasirika hata a-ki-guswa tu.*

SM3sg-PRS-怒る-RVS ~でさえ SM3sg-COND-触られる だけ

「彼は触られたただけですぐに怒る。」

(37) **A-li-sikitika-sikitika kwa sababu ya ku-kosa mitihani mingi*

SM3sg-PST-悲しむ-RVS ~で 理由 9 の 9 INF-失敗する 試験 4 多くの 4

(intd. 彼は多くの試験に失敗して何度も悲しんでいる。)

(36) *-kasirika* 「怒る」は、許容度はかなり低いのが、かろうじて派生が可能であるのに対して、同じく感情を表す動詞の (37) *-sikitika* 「悲しむ」は、反復形が完全に不適格なようである。このように、説明が難しい例はあるものの、反復形の派生を阻む要因には、

終着点を設定できるという限界的な動詞の性質が何らかの形で関わっていることは明らかであろう¹²⁾。

4. 結語

これまで「動作の繰り返し、継続、強化、弱化を表す」と説明されてきたスワヒリ語動詞の反復形の用法であるが、動詞のサンプルを増やしたことにより、複数性が核となって、繰り返しや継続のほかにも、強化や弱化、同時多発性、習性などの用法が生じていることが明らかになった。ただし、各用法の間に明確な境界があるわけではなく、動詞自体が持つ意味によって決まっているわけでもない。これらの用法の違いは、文脈や強調される側面の違いによるものであると思われる。また、これまで「非常に生産的である」と言われてきたが、派生には制限がある。反復形を派生させることができるのは、終着点のない非限界的な動詞に限られており、終着点のある限界的な動詞は反復形を作りにくい。これは動作動詞であっても状態動詞であっても同じである。上記のようなことが明らかになった一方で、課題も残されている。まずは用法についてである。8つの用法の間に明確な境界はなく、用法が動詞によって決まっているわけではないことは前述のとおりだが、動詞によって解釈されやすい用法に傾向は見られる。例えば、(18)で挙げた *-imbaimba* は、「頻繁に歌う (Novotna 2000:65)」や「長い時間歌い続ける (Loogman 1965:145)」のような繰り返しや習性、継続の意味にはなりやすいが、「力強く歌う」などといった強化の意味にはなりにくいようである。動詞と用法の関係はもう少し詳しく調べる必要がある。また、使役形や受動形といっ

¹²⁾ *-chapuka* 「急ぐ」は、*-kimbia* 「走る」と同じように基本形で終着点が見られるわけではないが、(ii b) のように反復形を作れない。

- (ii) a. *A-ta-chapuka ofisi-ni ndani ya dakika tatu.*
SM3sg-FUT-急ぐ 事務所 9-LOC 内 9 の 9 分 10 三
「彼は3分以内には事務所を出るだろう」
- b. **A-na-chapuka-chapuka.*
SM3sg-PST-急ぐ-RVS
(intd. 彼は何回も急ぐ/いつも急いでいる、遅刻魔だ。)

この動詞に関しては、反復形を派生しにくい要因を終着点の有無によって説明することはできない。動詞語幹 *-chapuka* は反復形を作ることができないが、*-chapuka chapuchapu* 「とても(必死に)急ぐ」という、動詞と派生関係にある副詞 *chapuchapu* を後続させる現象がある (Mohammed 1977:41-45)。この *chapuchapu* という重複の表現がすでに存在していることが反復形の派生を阻んでいるのかもしれない。このように、ほかの要因が絡んでいると思われるものもわずかながら存在する。

た派生形との関係についても検討する必要がある。さらに、選択する時制接辞の違いによって反復形の派生に影響が及ぼされることが可能性として十分に考えられるが、これについては今回全く触れることができなかった。また、習慣を表すテンスアスペクトマーカ-*hu-*と、習性や習慣を表す用法との関係も調べる必要があると思われる。

記号・略号一覧

SM (Subject Marker): 主語接辞	OM (Object Marker): 目的語接辞
PRS (Present): 現在時制	PST (Past): 過去時制
ANT (Anterior): 完了時制	FUT (Future): 未来時制
COND (Conditional): 条件接辞	INF (Infinitive): 不定詞接辞
R (Relative): 関係接辞	APPL (Applicative): 適用形派生接辞
RVS (Reduplication of Verb Stem): 反復形	
FV (Final Vowel): 動詞語尾	LOC (Locative): 場所接辞

参考文献

- Ashton, E.O. 1947. *Swahili Grammar (including intonation)*. Longmans.
- Inkelas, Sharon. & Zoll, Cheryl. 2005. *Reduplication: Doubling Morphology*. Cambridge University Press.
- Loogman, Alfons. 1965. *Swahili Grammar & Syntax*. Duquesne University Press.
- Mohammed, S.A. 1977. *Misemo, milio na Tashbihi*. Longhorn Kenya.
- Novotna, Jana. 2000. "Reduplication in Swahili." *Swahili Forum* VII: 57-73.
- Nurse, Derek. 2008. *Tense and Aspect in Bantu*. New York Oxford Press.
- Shadeberg, C.Thilo. 1992. *A Sketch of Swahili Morphology*. Rüdiger Köpper verlag.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- コムリー、バーナード. 1988. 『アスペクト』 山田小枝 (訳) むぎ書房.
- 中島久. 2000. 『スワヒリ語文法』 大学書林.
- 牧野友香. 2015. 『スワヒリ語における動詞語幹の全体重複と部分重複について』 大阪大学大学院言語文化研究科に提出した未刊の修士論文.
- 守野備雄・中島久. 編. 1995. 『スワヒリ語常用 6000 語』 大学書林.